

MINAMIURA LABORATORY NEWS LETTER

研究するということ

博士課程後期1年 竹内陽介



学部生のみなさんがゼミ通信を書いてくれていて、院生も書きましようという運びになりました。「ゼミ通信では、学び直しか日々の考えていることとかを書くんです」と南浦先生がおっしゃったので、何を書こうかと思いましたが、スッと手が動きませんでした。中京大学の巨理先生のゼミ通信を参考にされているとのことでしたので、Xの記事を見てみると、「教育学研究」に載っている大日方さんの学級通信に関する論文があるというじゃないですか。気になって読んでみました。これまでしばらく学級担任をしてきましたので、学級通信も何度も出してきましたが、この論文に書かれている応答のある学級通信を書いたことはありませんでした。時に、保護者からの意見を載せている先生がいましたが、「ああ、こういうことだったのかもしれない」と思いました。その裏には、保護者か

2月上旬に大寒波が来て、東広島市も吹雪に見舞われましたね。こんなに雪が来るのかと驚きました。

らの応答は必須ではないものの、応答したいと思わせる書き手の高まりがあるのではなかろうかと思いました。それは読み手に「おもしろい」と思わせる視点であったり考えの軌跡だったり、そういう自分の関心とつながることが、ある程度の熱量で書かれていることで応答したいという気持ちを起こさせることなのかなと思いました。

私が「おもしろいな」と思ったのは、研究においても似たようなことが言えるのではないかなと思ったのです。学級通信と論文は全然違うものですが、どちらも読者がいます。論文とは、自分の研究したことを書くのですから熱量は保証されていると思いますが、「自分が研究したことを知ってください！」というだけではなく、それが誰かを動かすことになるということ意識して、研究の成果を文字にしていくことで、受け取った人（読者）が動き出すのがあるべき形なのかなと思いました。

そんな私が研究していることは、外国人児童生徒と学校カリキュラムについてのことです。この1年でいろんな本や論文を読み、主に院生ゼミで話し合い考えてきたことが膨大で、ちっともまとまらないのですが（また、個別のネタは別の機会に）、こうして勉強をしてきて理解したのは、研究には動向があるということです。わかっているつもりでしたが、実際には全然わかっていなかったのだと思知らされました。外国人児童生徒が学校に増えていることは、それぞれの学校では問題です。なんとかしてあげたいと思う先生は少なくありません。けれども、その思いだけでは研究にはならないのです。

私はこれまで、言語教育とか応用言語学の分野で勉強してきました。しかし、学校で起きていることに届きにくいという感覚があり、博士後期課程は教育学から研究をしたいと思って、南浦先生に受け入れていただきました。教育学の分野では、日本語指導は必要なものとして認識されていても、まだ全体像が知られていないと思います。外国人児童生徒にまつわるいろいろは、教育学の分野においてどのような問題を提起しうるのが、教育学の文脈で語らないといけないということです。そうしないと、教育学の研究者や関係者の注意を引くことができないのです。言うのは簡単ですが、具現化するのは難しいです。私の論文を読んだ人が、ハッとて、次の研究が生まれるような、興味を湧き立てる研究ができるように頑張っています。



私は鉛筆派です。